

（写真提供：外谷弦太）

第24回山階芳麿賞記念シンポジウム

鳥の歌が拓いた音声コミュニケーションの科学

日時　2026年9月12日㊏　13：30～16：00（開場12：30）

会場　東京大学農学部 弥生講堂

主催／公益財団法人 山階鳥類研究所
共催／朝日新聞社
後援／我孫子市

目次

プログラム…… 4

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって…… 5
山階鳥類研究所総裁　秋篠宮文仁

第24回山階芳麿賞　贈呈理由 …… 6
山階芳麿賞選考委員長／山階鳥類研究所所長　小川博

受賞者　受賞のことば …… 7
略歴 …… 8

山階芳麿賞記念シンポジウム「鳥の歌が拓いた音声コミュニケーションの科学」
講演要旨

「ジュウシマツ研究40年」…… 9
帝京大学　岡ノ谷一夫

「ジュウシマツ原種の野外研究」…… 10
株式会社スタートライン　香川紘子

「ジュウシマツと原種の遺伝子比較」…… 10
麻布大学　戸張靖子

「ジュウシマツと原種の歌発達学習」…… 11
理化学研究所　高橋美樹

「ジュウシマツと原種のストレス応答」…… 11
日本医療科学大学　鈴木研太

「ジュウシマツの歌学習とミラーニューロン」…… 12
東京大学　鈴木祐佳

「ジュウシマツ研究から考える音声コミュニケーションとヒト言語の起源」… 13
帝京大学　岡ノ谷一夫

山階芳麿賞について…… 14

山階鳥類研究所の紹介…… 16

賛助会制度のご案内…… 17

プログラム

開会

ごあいさつ	山階鳥類研究所理事長	壬生基博
ごあいさつ	朝日新聞社執行役員（広報・ブランド担当）	羽根和人
贈呈理由	山階芳麿賞選考委員長／山階鳥類研究所所長	小川博

講演

ジュウシマツ研究40年	帝京大学	岡ノ谷一夫
ジュウシマツ原種の野外研究	株式会社スタートライン	香川紘子
ジュウシマツと原種の遺伝子比較	麻布大学	戸張靖子
ジュウシマツと原種の歌発達学習	理化学研究所	高橋美樹
ジュウシマツと原種のストレス応答	日本医療科学大学	鈴木研太
ジュウシマツの歌学習とミラーニューロン	東京大学・帝京大学	鈴木祐佳

（休憩）

ジュウシマツ研究から考える音声コミュニケーションとヒト言語の起源

帝京大学　岡ノ谷一夫

質疑応答

岡ノ谷一夫／香川紘子／戸張靖子／高橋美樹／鈴木研太／鈴木祐佳

閉会

司会　山階鳥類研究所副所長　尾崎清明

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって



公益財団法人 山階鳥類研究所総裁

秋篠宮文仁

本年、第24回山階芳麿賞は、岡ノ谷一夫帝京大学特任教授・東京大学名誉教授にお贈りすることになり、去る７月24日に贈呈式が行われました。受賞された岡ノ谷教授に心からお祝いを申し上げます。

岡ノ谷教授とそのグループは、日本の伝統的飼い鳥であるジュウシマツが、いくつもの音が組み合わさった複雑な形のさえずりを作る仕組みを明らかにされました。また、ジュウシマツの野生原種がコシジロキンパラであることを行動学的・分子生物学的に証明されました。さらに、雌が雄の複雑な歌を好むことや、２種の比較からジュウシマツのほうがストレスに強くなったり恐怖反応が弱くなったり攻撃性が低くなったりするなど、家禽化によって引き起こされる行動や脳の構造の変化について、岡ノ谷教授の研究室からは次々に報告がなされています。

これらの比較研究の成果は、家禽化が鳥の歌の学習・脳・社会行動にどのような影響を与えるのかを科学的に検証するための基盤研究として、この分野の今後の発展に大きな意義をもつものです。岡ノ谷教授の業績は、ジュウシマツのさえずりを通じて、動物の音声学習、音声コミュニケーション、ひいては言語の起源と進化を考えるうえで重要な手がかりを与えるものとして、世界的に高く評価されています。また、岡ノ谷教授の研究をきっかけに、海外の多くの研究室でジュウシマツが研究に用いられるようになったことは、科学上の大きな貢献であると同時に、日本の飼い鳥文化を世界に知らせることにもつながりました。

本日は、岡ノ谷教授への山階芳麿賞贈呈を記念して、シンポジウム「鳥の歌が拓いた音声コミュニケーションの科学」を開催いたします。このシンポジウムでは岡ノ谷教授と研究グループの方々に、ジュウシマツ研究の歩みと今後の展開をご紹介いただきます。

本シンポジウムを通じて家禽化についての理解を深めることや、身近な飼い鳥であるジュウシマツのさえずりから人間の言語の起源と進化について考えていただく機会となれば幸いです。

おわりに、岡ノ谷教授ならびに薫陶を受けられた方々のご研究が今後ますます発展し、一層の活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

第24回山階芳麿賞　贈呈理由



山階芳麿賞選考委員長／公益財団法人 山階鳥類研究所所長

小川博

岡ノ谷一夫氏は、日本の伝統的飼鳥であるジュウシマツを対象としてさえずりにみられる複雑な歌系列、すなわち複数の音が多様に組み合わされて歌を形づくる仕組みを明らかにしました。

さらに、ジュウシマツとその原種であるコシジロキンパラとの比較研究を通じて、家禽化（家畜化）にともなう脳と行動の変化を明らかにし、ジュウシマツの歌を制御する脳構造に関する神経科学的知見や、家禽化が社会性に影響を及ぼすことを示されました。また、家禽化に伴って現れる歌や行動の変異が、Wilkinsonらの提唱する「家畜化症候群」に合致することを示し、ジュウシマツとコシジロキンパラのストレス耐性、新奇恐怖、攻撃性などの比較研究へと発展させました。これらの成果は家禽化による行動の複雑化を示す代表的研究として高く評価されており、単なる分類学的事実の確認にとどまらず、家禽化が鳥の歌の学習・脳・社会行動にどのような影響を与えるのかを科学的に検証するための基盤研究となり、この分野の今後の発展に大きな意義を持つものです。

近年では、鳥類の音声学習に関わる神経機構、とくに聴覚情報と発声運動の対応を担うミラーニューロン様の神経活動に着目し、ジュウシマツの脳内で歌の知覚と産出がどのように結びつけられているのかを明らかにする研究を進めておられます。

以上の業績はいずれも、鳥のさえずりを通じて、音声学習、音声コミュニケーション、ひいては言語の起源と進化を考えるうえで重要な手がかりを与えるものとして世界的に高く評価されています。また、岡ノ谷氏の研究が契機となり、欧米を含む多くの研究室がジュウシマツを研究対象とする流れを生み出しました。さらに、岡ノ谷氏はこれらの研究を通じて後進の教育・育成にも尽力され、多くの研究者が氏のもとから巣立っています。

以上のように、岡ノ谷氏は当該分野における世界の研究を牽引し、鳥類学の発展に大きく貢献されました。山階芳麿賞選考委員会は、これらの功績が山階芳麿賞にふさわしいものと判断し、第24回山階芳麿賞を岡ノ谷一夫氏に贈呈することといたしました。

受賞のことば



帝京大学特任教授・東京大学名誉教授

岡ノ谷一夫

山階鳥類研究所総裁・秋篠宮殿下、壬生理事、小川所長、選考委員の皆様、このたびは、伝統ある山階芳麿賞を授与いただき、誠にありがとうございます。この分野で大きな業績をあげてこられた上田恵介先生、小西正一先生、渡辺茂先生に続いてこの賞をいただけることを、身に余る光栄に存じます。

山階芳麿賞はこれまで、主として野鳥の研究と保護に対して授与されてきました。飼い鳥の研究による受賞は、私が初めてかもしれません。しかし、日本の飼い鳥研究は、江戸時代から連綿と続く重要な研究分野です。大正時代に出版された鷹司先生の『飼ひ鳥』は、その集大成の一つです。

なかでもジュウシマツは、祖先種であるコシジロキンパラが270年以上前に中国から輸入されて以来、白い羽色や繁殖のしやすさが選択されてきました。私は40年ほど前、初めてジュウシマツのさえずりを聞き、それが祖先種のさえずりとまったく異なることに驚きました。さえずり自体が選択されたという記録はありません。したがって、その変化は家禽化の副産物と考えられます。

私はこの問題をテーマとして、40年近く研究を続けてきました。その過程では、飼い鳥研究家の石原由男さま、鷲尾紘一郎さまからも貴重なご指導をいただきました。

私の研究は、日本の飼い鳥研究と、ヨーロッパに起源をもつ動物行動学という、二つの流れに根ざしています。とりわけ、ティンバーゲン先生が示した、適応、進化、発達、メカニズムという四つの問いは、研究を進める原動力となりました。また、その流れをくむピーター・マーラー先生と、その弟子であるボブ・ドゥーリング先生からの教えは、私の研究に直接つながっています。こうした二つの伝統を融合する環境を与えてくださった諸先生方、諸研究機関、歴代研究室の諸君、現所属の帝京大学に心より御礼申し上げます。

最後に、今は亡き両親、そして今も私を支えてくれている妻と二人の子どもに感謝いたします。私の母は「トキ」という名前でした。そして、山階芳麿先生が保護に力を尽くされたトキの中には、「カズ」と呼ばれた1羽がいました。私の名前は一夫ですので、なんとも不思議なご縁を感じます。

母は今年7月に亡くなりました。この賞を母に捧げます。

この賞の栄誉にかなう研究を、これからも進めてまいります。

受賞者　略歴

岡ノ谷一夫　（おかのや かずお）

【生年月日】　1959年7月16日 栃木県生まれ
【専門】生物心理学

【学歴・職歴】
1983年　慶應義塾大学文学部社会・心理・教育学科卒業
1989年　メリーランド大学大学院心理学研究科生物心理学専攻修了、Ph.D.
1989年　日本学術振興会特別研究員・上智大学博士研究員
1990年　科学技術庁科学技術特別研究員・農林水産省農業研究センター鳥害研究室兼任職員
1993年　井上科学財団特別研究員（井上フェロー）・慶應義塾大学心理学研究室訪問研究員
1994年　千葉大学文学部助教授
2004年　理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー
2010年　東京大学大学院総合文化研究科教授
2022年　帝京大学先端総合研究機構教授
2025年　帝京大学先端総合研究機構特任教授

【主な著書】
『岩波科学ライブラリー92 小鳥の歌からヒトの言葉へ』（岡ノ谷一夫 2003 岩波書店）
『さえずり言語起源論』（岡ノ谷一夫 2010 岩波書店）
『言葉はなぜ生まれたのか』（岡ノ谷一夫・石森愛彦 2010 文藝春秋）
『言葉の誕生を科学する』（小川洋子・岡ノ谷一夫 2011 河出書房新社）
『「つながり」の進化生物学ーはじまりは、歌だった』（岡ノ谷一夫 2013 朝日出版社）
『脳に心が読めるか』（岡ノ谷一夫 2017 青土社）
『人間の心がわからなかった俺が、動物心理学者になるまで』（岡ノ谷一夫 2025 新潮社）

【受賞】
2001年　American Psychological Association 米国心理学会・最優秀比較心理学論文賞 「鳥類の音声知覚」の論文に関して
2009年　日本科学技術ジャーナリスト会議・科学ジャーナリスト賞　書籍「ハダカデバネズミ」の出版に関して
2009年　中山人間科学振興財団・中山賞大賞受賞 「言語の生物学」への貢献に関して
2011年　日本動物行動学会・第1回日高敏隆賞受賞 「動物行動学関連の著作・講演活動」に関して
2012年　財団法人ニューロクリアティブ研究会・創造性研究褒賞 「脳と創造性に関する基礎的な研究」に関して

【その他】
2008年　日本学術会議連携会員
2012年　Evolang IX言語の起源と進化に関する国際会議・大会長
2017年　読売新聞読書委員
2022年　JCoLE言語の起源と進化に関する3学会国際合同会議・大会長
2023年　IBAC2023生物音響学国際会議・大会長

講演要旨

ジュウシマツ研究40年



帝京大学

岡ノ谷一夫

ジュウシマツは、日本で古くから飼われてきた小鳥である。祖先は、約270年前に中国から輸入されたコシジロキンパラとされている。羽色、社会性、繁殖行動について選択交配が重ねられ、白っぽい羽色をもち、群れで飼いやすく、よく繁殖し、他種の卵まで孵して育てる鳥になった。これが家禽化の過程である。その結果、ジュウシマツは、原種よりも複雑な歌をうたうようになった。歌についての選択交配はなかったのに、なぜだろう。

私は米国留学中の1988年ころからジュウシマツを飼い始め、帰国後の1990年ころから、聴覚と発声の進化および神経機構を研究してきた。英文論文も読んだが、舟崎克彦氏の『雨の動物園』、鷹司信輔氏の『飼ひ鳥』、鷲尾絖一郎氏の『ジュウシマツの謎を追う！』などの書籍から、ジュウシマツのことを学んだ。

研究を始めると、雌雄で呼び鳴きの音響構造が異なること、成鳥の歌の維持にも自分の声を聞く必要があること、原種と家禽種で歌の構造が異なることなどが、次々にわかった。小さな飼い鳥を調べているはずなのに、出てくる問題は、学習、進化、脳、音声コミュニケーションという大きなものばかりであった。そこで、この鳥を徹底的に調べようと考えた。それから早40年である。

本シンポジウムでは、私の研究室で研究を進めてきた（もと）学生たちが、野外生態、遺伝子、歌の発達、ストレス応答、脳について話す。最後に私が成果をつなぎ、鳥の歌が拓いた音声コミュニケーションの科学とヒト言語の起源を論じる。

講演要旨

ジュウシマツ原種の野外研究



株式会社スタートライン

香川紘子

ジュウシマツの原種であるコシジロキンパラの歌を野外で録音したところ、その複雑さは地域によって異なっていた。さらに、近縁種と混群をつくりにくい地域ほど、歌が複雑になる傾向があった。歌は鳥の種類だけでなく、どのような鳥と、どのような環境で暮らすかによっても変化するらしい。ジュウシマツの歌の進化を考える手がかりとして、歌の複雑さと野外環境との関係を紹介する。

ジュウシマツと原種の遺伝子比較



麻布大学

戸張靖子

遺伝情報を調べる解析により、ジュウシマツが限られた祖先個体の近親交配を重ねてつくられたことがわかった。原種との比較から、羽色や社会性、ストレス反応、歌の変化に関わる遺伝領域の候補が絞り込まれてきた。270年という短期間の家禽化がどのような遺伝的変化をもたらしたのか、ブリーダーの協力や国際共同研究により明らかになった最新知見を紹介する。

講演要旨

ジュウシマツと原種の歌発達学習



理化学研究所

高橋美樹

幼鳥は、成鳥の歌をまねながら自分の求愛歌を身につける。ジュウシマツと原種の歌の違いは生まれつき決まっているのか、それとも育つ環境によって生じるのか。両者の卵を入れ替える「里子実験」や、大きなケージで複数個体を繁殖させる「自由交配実験」から、遺伝と学習環境が歌の発達にどう関わるのかを紹介する。

ジュウシマツと原種のストレス応答



日本医療科学大学

鈴木研太

野生のコシジロキンパラに比べ、ジュウシマツではストレスホルモンの濃度が低く、恐怖反応や攻撃性も低下していた。家禽化は、羽色や繁殖行動だけでなく、危険に対する体と行動の反応も変えたのである。こうした変化によって、歌を複雑にする素地が生まれたのかもしれない。ストレス応答と歌の進化との関係を紹介する。

ジュウシマツの歌学習とミラーニューロン



東京大学・帝京大学

鈴木祐佳

幼鳥が手本をまねるとき、他個体の歌を聞くことと、自分で歌うことは、脳の中でどう結びついているのだろうか。私たちは大脳基底核で、歌を聞くときにも自ら歌うときにも活動するミラーニューロンを発見した。その性質と、手本の歌と自分の歌を比べて模倣する仕組みへの示唆を紹介する。

ジュウシマツ研究から考える
音声コミュニケーションとヒト言語の起源

帝京大学

岡ノ谷一夫

ジュウシマツとコシジロキンパラの歌は、なぜ異なるのだろうか。第一に、家禽化によって野生で生きるための制約から解放されたことがあろう。攻撃性やストレス応答が弱まり、捕食や採餌への負担が減った結果、歌を学び、複雑にする余地が生まれたのかもしれない。第二は、メスによる選択である。メスは複雑な歌を聴くと繁殖行動が活発になる。複雑な歌をうたうオスが選ばれ、その歌を次世代のひなが学ぶ。このような選択と学習が世代を越えて繰り返されることで、ジュウシマツの歌は複雑になった可能性がある。

ジュウシマツの研究は、複雑な行動がなぜ進化し、脳がそれをどう実現するのかを調べるのに有効である。ヒトの話し言葉も、周囲の声を聞いて学び、音をある順序に並べ、自分の声を聞きながら調整する。この点で、鳥の歌とヒトの言葉には共通する部分がある。

私たちは最近、ジュウシマツの歌の中に、ヒトの言葉にも見られる統計的な構造を発見した。ヒトの言葉では、よく使われる単語ほど短い。歌でも、音要素がいつも同じ順番で現れる部分を一つのまとまり（チャンク）として区切ると、よく現れるまとまりほど短かった。これは、ジュウシマツが単語を使うという意味ではない。複雑な音の系列を学ぶ際に、鳥の歌とヒトの言葉に共通する制約が働く可能性を示す結果である。

ジュウシマツの歌は主として求愛に関わり、表現は限定されている。一方、ヒトの言葉は、単語や文を組み合わせ、目の前にないものや新しい考えまで表現できる。この点で、鳥のさえずりは明らかに言葉ではない。では、なぜ鳥の歌を研究することが、言葉の起源を考えることにつながるのだろうか。言葉は、音声を学ぶこと、手本をまねること、自分の声を聞いて修正すること、音を一定の順番に並べることなど、いくつもの能力から成り立っている。ジュウシマツの研究から、言葉に関与するかも知れない能力の一部がどのように進化し、脳によって実現されるのかを調べることができる。鳥を人間に似せて語るのではなく、鳥を鳥のまま理解する。その先に、ヒトの言葉がどのように生まれたのかを考える道があるはずだ。私はそう信じて研究を進めてきた。

山階芳麿賞について

山階芳麿賞とは



山階芳麿賞のメダル
表：山階芳麿博士の肖像。裏：ヤンバルクイナのレリーフ、受賞年と受賞者の氏名が刻印される。

- 山階芳麿賞は、財団創立50周年にあたる1992(平成4)年に、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。
- 山階鳥類研究所 所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者（個人または団体）を選考します（委員会の構成は次ページを参照)。
- 受賞者には、山階鳥類研究所総裁の秋篠宮皇嗣殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらい、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第12回（2003年）の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金50万円と盾)が贈られることになりました。

山階芳麿博士



山階芳麿博士は、1900（明治33）年7月5日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学（現東京大学）理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎を学びました。同選科を1931(昭和6)年に修了、1932(昭和7)年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939（昭和14）年から、北海道帝国大学（現北海道大学）の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942(昭和17)年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を1949(昭和24)年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌1950(昭和25)年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977(昭和52)年、ノーベル賞受賞者K.ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン・デラクール賞を受賞、翌78(昭和53)年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第1級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989（平成元）年1月28日没、88歳。主要著書に『日本の鳥類と其生態』(第1巻：1933、第2巻：1941)、『世界鳥類和名辞典』(1986)他、論文多数。

第24回山階芳麿賞選考委員

委員長：	小川博	公益財団法人山階鳥類研究所　所長
委員：	井田徹治	一般社団法人共同通信社　科学部編集委員
	牛山徹也	株式会社NHKエンタープライズ　第２制作センター 自然科学部　プロデューサー
	尾崎清明	公益財団法人山階鳥類研究所　副所長
	小坪遊	株式会社朝日新聞社　くらし科学医療部　次長
	小宮輝之	元　恩賜上野動物園　園長
	早矢仕有子	北海学園大学　工学部　生命工学科　教授
	水田拓	公益財団法人山階鳥類研究所　自然誌・保全研究ディレクター
	和田勝	東京医科歯科大学　名誉教授
	渡邉茂	慶応義塾大学　名誉教授

（五十音順）※役職は選考当時

歴代受賞者

第1回(1992)	羽田健三	信州大学名誉教授
第2回(1993)	松山資郎	山階鳥類研究所顧問
第3回(1994)	中村司	山梨大学名誉教授
第4回(1995)	黒田長久	山階鳥類研究所所長
第5回(1996)	中村登流	上越教育大学名誉教授
第6回(1997)	正富宏之	専修大学北海道短期大学教授
第7回(1998)	樋口広芳	東京大学大学院教授
第8回(1999)	山岸哲	京都大学大学院教授
第9回(2000)	藤巻裕蔵	帯広畜産大学教授
第10回(2001)	小城春雄	北海道大学大学院教授
第11回(2002)	中村浩志	信州大学教授
第12回(2003)	石居進	早稲田大学名誉教授
第13回(2004)	由井正敏	岩手県立大学教授
第14回(2006)	長谷川博	東邦大学教授
第15回(2008)	立川涼	愛媛大学名誉教授
第16回(2010)	森岡弘之	国立科学博物館名誉研究員
第17回(2012)	日本イヌワシ研究会	－
第18回(2014)	(特別賞) 橘川次郎	クイーンズランド大学名誉教授
	(特別賞) 小西正一	カリフォルニア工科大学名誉教授
第19回(2016)	上田恵介	立教大学名誉教授
第20回(2018)	江崎保男	兵庫県立大学教授／兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長
第21回(2020)	渡辺茂	慶応義塾大学名誉教授
第22回(2022)	日本雁を保護する会	－
第23回(2024)	内藤靖彦	国立極地研究所名誉教授

敬称略、受賞者の所属・職名は受賞当時

山階鳥類研究所について



南平台にあった鳥類標本館



現在の山階鳥類研究所

山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900－1989）が1932（昭和7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和17）年に文部省（当時）から許可を得て、財団法人として発足しました。

その後、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、また1986（昭和61）年には、礼宮殿下（現秋篠宮皇嗣殿下）を総裁としてお迎えしました。2012（平成24）年4月、公益法人制度改革に伴い、公益財団法人に移行し、現在に至ります。

現在、山階鳥類研究所は、日本最多の鳥類標本と文献を所蔵し、鳥類標識調査を長年実施している機関として、外部の鳥類研究者や関連分野の研究者、アマチュアの方々との連携をはかりながら鳥類全般に関する科学的研究を行っています。

所蔵する鳥類標本約8万点と、図書・文化資料8万点については、その維持管理とデータベース化、コレクションのいっそうの充実を目指した収集を行っています。また、これらの資料を用いた鳥類に関する基礎的なデータの作成や研究も行っています。特に近年では、X線CTを用いた標本の3次元形態をデジタル化・アーカイブ化する取り組みや、約2万点を所蔵する組織サンプル・DNAを用いた鳥類の系統・進化・分類に関する研究に力を入れています。

さらに、鳥類の渡り経路や寿命の解明、環境の長期的モニタリングなどの視点から環境省委託の鳥類標識調査や海鳥の繁殖状況調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめに取り組んでいます。アホウドリの新繁殖地への誘致やヤンバルクイナの生態研究など、希少鳥類の保全のための研究も行っています。

理事長、所長を含め人員数は24名で、そのうち14名の研究員・専門員が研究業務にあたっています。鳥類学専門誌「山階鳥類学雑誌」を年2回、ニュースレター「山階鳥研NEWS」を隔月発行して、鳥類学と地球環境保全の普及啓発を行っています。

現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで、相互に研究協力しています。また、研究や教育に関する協定を、京都市動物園と芝浦工業大学柏中学高等学校と結んでいます。さらに、我孫子市鳥の博物館を所管する我孫子市教育委員会と連携協定を結んで、同博物館と、所蔵資料や研究成果の展示、講演会や共同研究などを通じて連携しています。

賛助会制度のご案内

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学的研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、生物多様性の維持、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研NEWS」（年6回発行）や、学術雑誌「山階鳥類学雑誌」（年2回）をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。





賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

○法人賛助会員

（年会費1口5万円）「山階鳥研NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」をお送りします。

○個人賛助会員

（年会費1口1万円）「山階鳥研NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

（年会費1.5口1万5千円）「山階鳥研NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

賛助会員申込書（個人・法人）および詳しい資料をお送りいたしますので、入会をご希望の方は下記へご連絡ください。山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしくお願いいたします。

［入会申込み・資料請求の宛先］

〒270-1145　千葉県我孫子市高野山115　（公財）山階鳥類研究所　事務局

TEL：04-7182-1101　FAX：04-7182-1106

E-mail：kaiin@yamashina.or.jp　URL：https://www.yamashina.or.jp

※山階鳥類研究所は公益財団法人です。当財団に対する寄附金及び賛助会費は税制上の優遇措置の対象となります。



【3種のカワセミ】

山階芳麿博士は、昭和7年に研究所を設立した際、1枚のステンドグラスを作り、研究所の玄関に飾りました。これら3種のカワセミは、左から旧北区のアカショウビン、東洋区のヤマショウビン、オーストラリア区のシロガシラショウビンで、広くアジアや太平洋産鳥類を研究するという目標を表わしており、「山階鳥類学雑誌」の表紙や「山階鳥研NEWS」の題字にも使われています。

このステンドグラスは、東京から現在の山階鳥類研究所に移設され、今もわたしたちの活動を見守っています。

第24回山階芳麿賞記念シンポジウム
鳥の歌が拓いた音声コミュニケーションの科学

発行日： 2026年9月12日
発行所： 公益財団法人山階鳥類研究所
〒270-1145
千葉県我孫子市高野山115



左：コシジロキンパラ（野生）
右：ジュウシマツ
（写真提供：池渕万季）